

知 識 探 訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

大伯公とその周辺

片岡樹 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授)



ペナン島アイルイタム福德正神廟の大伯公 (筆者撮影)

大伯公(トアペコン)という言葉を見たり聞いたりしたことがあるかもしれない。これはおそらくマレー半島で最もポピュラーな中国系の神であり、屋敷地や地域社会の守護神とされている。多くの場合、片手につえをつき、もう片手に銀塊を持った優しそうなおじ

いさんの姿の神像で祭られる。

この神様はいくつかの別名を持つ。一つは福德正神で、これは大伯公の、より公式な文語の呼称だとされていることが多い。廟(びょう)での文語表記で「福德」と書かれていたら、そこでは大伯公が祭られているとみて間違いない。

もう一つの別名は本頭公(ブンタオコン)である。一般にはタイでの中国系土地神のイメージが強い本頭公だが、ペナン州やクランタン州では大伯公の別名としても一部で使われている。ペナン州のタンジュントコンにある海珠嶼大伯公廟のある場所が中国語で本頭公巷と呼ばれているのがその典型的な例である。

大伯公廟では、しばしばダト公と一緒に祭られている。ダト公(拿督公)とは、土着の土地神であり、従ってイスラム教徒(ムスリム)だとされている。元々はマレー人ムスリムの神秘主義者が崇拝していたダト・クラマツが、中国系移民の土地神崇拝と結びついて生じたのがダト公だとされている。

ダト公の祭り方はさまざまである。最も素朴な形は大きな石を神に見立てて祭ることであるが、神像を置く場合は、大伯公の神像にマレー服を着せたものも用いられる。また、イスラム教徒であるダト公は偶像崇拝を嫌うという理由で、色のついた旗などをもって神像に代える場合もある。

大伯公はある時期のマレーシアの歴史を動かした存在だった、と聞くと意外に思うかもしれない。

19 世紀南洋の華僑移民たちを束ねていたのが、移民たちの就業先のあっせん、さらには福利厚生までを担っていた秘密結社であった。マレー半島では、義興(ギ

ーヒン)、建徳(キアンテック)、海山(ハイサン)などがそうした秘密結社の代表格であり、義興と建徳・海山連合とが互いにマレー半島のスズ鉱利権などを巡り、19 世紀を通じて激しく争った。

特にペラ州のスズ鉱では、スルタン位争いに両派がそれぞれ加担することで内戦状態となり、その帰結は英国の介入によるマレー半島諸国の保護国化の開始であった。義興と建徳という2つのライバルは、実はいずれもが大伯公を守護神に頂いていた。言い換えれば、マラヤの植民地化過程において、大伯公は主役の1人としての役割を演じていたのである。

シンガポールからマレーシアにかけて広がる大伯公崇拝は、果たしてどこまでたどれるであろうか。

南タイのプーケットからラノー、さらにはミャンマー領のベイ、ダウェー、さらにヤンゴンにかけては、マレーシアの大伯公と同種の神像を祭り、それを文語では福德正神、口語では大伯公および本頭公と呼ぶという全く同じ習慣が広がっている。これはおそらく、ペナン州を中心とするスズの集荷網や秘密結社ネットワークがマレー半島西海岸一帯に広がることによって生じたものだろう。

ただし、タイ側、ミャンマー側ではホスト社会の主要民族がタイ人やビルマ人になるため、土着の神との習合がマレーシア側とは少しずつ異なってくる。大伯公を追ってマレー半島を北上してみるのも楽しいかもしれない。

< 筆者紹介 >

1967 年、東京生まれ。九州大学大学院比較社会文化研究科修了。博士(比較社会文化)。専門は東南アジア研究と文化人類学。プーケットのほか、タイ国北部山地など、タイ国の周縁地域の社会・文化の動態について、近隣諸国を視野に研究を行ってきた。東南アジアと東アジアにまたがる周縁社会と国家との関係、および彼らの宗教の在り方の再検討を研究の主題とする。主要論文は「土地神が語るエスニシティと歴史：南タイ・プーケットの本頭公崇拝とその周辺」(『南方文化』39 輯、2012 年)、「国民国家時代のメダン・ペナン・プーケット・コネクション：華僑華人移民と東南アジア現代政治」(『マレーシア研究』10 号、21 年)など。